

英語語彙におけるギリシア語系二重語(1)

安達 一美

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

Greek Doublets in the English Vocabulary(1)

Kazumi Adachi

Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

Doublets are defined as the words that are cognates but different in forms and/or in current meanings. English doublets can be categorized into the Italic-, Germanic-, Greek- and Eastern-derived doublets by their etymological sources. This series aims first to subcategorize, according to the process of their borrowings, the Greek doublets selected from Edward E. Allen's list of English doublets, and second to present categorically the processes of their borrowings into English. This paper, as its part I, focuses on the Greek doublets borrowed directly from Greek and through Latin.

1 はじめに

英語は、約50万語以上(OED収録語数)⁽¹⁾という世界で最も豊富な語彙を誇り、類義語や類義的表現を多種多様な様態で含んだ詳細な意味分布を形成している潤沢な言語である。それは、ゲルマン起源の言語であった英語が、歴史的な諸要因により、多くの民族・文化・言語と接触し、それから多くの語を柔軟に吸収してきた結果である。イギリスにおいて、平均的な教育を受けた人達の語彙数は約25000語であろうと推測されている⁽²⁾。The Advanced Learner's Dictionary of Current Englishの見出し語27,241語の本来語と借入語の比率を見ても、本来語は約27.43%であり、残りが借入語で、ロマンス語37.49%、ラテン語22.05%、ギリシア語1.59%、他のゲルマン諸語4.40%、その他7.04%である⁽³⁾。まさに、英語語彙はさまざまな文化を重層的に織りなしており、ヨーロッパ文化の縮図の感がある。

英語が外国語を借入するとき、同一語源の語を、一度のみならず異なる時期に数回にわたって借入したり、また、異なる幾つかの言語を経由して借入したりした。その結果、同一語源の語から異なった形態や意味をもつ語である二重語(Doublets)が生じた。二重語の知識は、一見関係のない語と考えられる語群の中核的語義を明らかにし、英語語彙についてのより確かで深みや幅のある理解へと導いてくれる。しかし、日本における学習事典は二重語の記載が十分でなく、また、記載がある場合でも認定の不統一などが散見される⁽⁴⁾。そこで、本論文では、既稿のイタリック系およびゲルマン系二重語の検証及び分類につき、英語語彙におけるギリシア語系二重語に焦点をあて、語源をもとに二重語の検証を行い、さらに、借入経路による分類のリストを提示する。

Edward E. Allenは、Walter W. SkeatがEymological Dictionary of the English Languageにおいて提示した二重語のリストを検討修正し、新たな二重語を加えて922組のリストを発表した⁽⁵⁾。しかし、Allenが取り上げた二重語を、語源を確認しながら検証してみると、二重語として認定できないものや新たに付け加えるべき二重語が見いだされた。そこで、ギリシア語系二重語の認定のために、Allenのリストからギリシア語系二重語を選び、また、取り上げられていなかった二重語を加え、53組を検証

対象とした⁶⁾。なお、今回のギリシア系二重語には、Allen のリストに取り上げられていたペルシャ語やセム語系起源でギリシア語やイタリック系言語を経由した二重語 10 組を別項として付け加える。二重語の検証にあたっては、語源と二重語の記載のある Klein と Barnhart の語源辞典⁷⁾と研究社の『新英和大辞典』に主として依拠した。また、二重語の借入時期や語義の変化をたどるために OED を参照した。

ギリシア語が英語に借入される経路には、直接借入の他に、ラテン語を経由し、さらに、フランス語、その他のロマンス語、ゲルマン語系諸言語などを経由する場合がある。二重語はその組み合わせによって幾つかの類型に分類することができる。経路の組み合わせによって、ギリシア語系二重語およびギリシア語経由のペルシャ語系・セム語系二重語を次のように分類する。つまり、[I]ギリシア語系二重語:A)ギリシア語より直接借入した二重語、B)二重語の一方がラテン語経由のもの、C)二重語の一方がラテン語・フランス語経由のもの、D)他の語族を経由した二重語、E)三重語、及び[II]ギリシア語経由のペルシャ語系・セム語系二重語である。今回は[I]のA)とB)を、そして、次号において残りの項目を扱う。

2 英語語彙におけるギリシア語起源の借入語

1) ギリシア語の成立と発達

印欧語族のギリシア人がダニューヴ河の中下流地方からバルカン半島を南下し、マケドニアの地を経てギリシアに入り定住したのは紀元前 1600 年以前といわれる。先住民族の高い文化や言語を摂取し、ミケーナイ文化を築き上げた。移動の途上や侵入後も、他の印欧語やエトルリア語など多くの言語と接触して、かなりの語彙を借入しながらギリシア語を成立させた。ギリシア文字の成立は少なくとも紀元前 900 年以前と考えられる。北セム文字に属するフェニキア文字を基につくられた。フェニキア文字には母音表記がなかったので、フェニキア文字のうちギリシア語には不要な子音を母音を表記する文字として使った。

古代ギリシアでは、植民活動が活発で、各地に都市国家が群立し、それぞれの地に多くの方言が発達した。前 8 世紀半ば以降、小アジア西岸イオニア地方のギリシア人の世界で、イオニア方言によるホメロスの英雄叙事詩が成立した。アテナイが前 5 世紀に栄え、ペルシア戦争においてギリシア連合の陸海の統帥権をスパルタから獲得し、エーゲ海の覇権を確立した。政治的にも商業的にも重要な地となったアテナイでは、イオニア系のアッティカ方言(古典ギリシア語)が話されていた。前 4 世紀には、アッティカ方言は、ほとんどギリシア全土に共通の文語となっていき古典時代の文芸や哲学の花が咲いた。そして、そのギリシア古典の成果が、ルネッサンス期の文芸復興を通して全ヨーロッパに影響を与えることになる。

前 4 世紀半ば、北方のマケドニアがギリシアを支配下においた。マケドニアのアレクサンドロス大王は、その勢力をエジプト、小アジアへと延ばし東方世界の覇者となった。しかし、アッティカ方言はギリシアの政治的勢力の消失後も征服者たちの言語として生き延び、ギリシアよりインドに至る広大な範囲におけるギリシア化を推進する結果となった。ギリシアの文化と言語が異民族の間に拡がると共に、共通語ギリシア語としてのコイナーが生まれ普及していった。

コイナーは、アッティカ方言を母体として、イオニア方言や他の多くの方言の要素を多分に加えたギリシア語圏の共通語である。コイナーは初め商業や政治に用いられる公用語であった。本土のギリシア人はコイナーのほかにも固有の方言を持っていたが、新しくヘレニズム圏内に入った人々はコイナー以外のギリシア語を知らず、コイナーを国際通用語として用いていた。やがて、本土のギリシア人もコイナーを会話に使用するようになり、コイナーはエーゲ海、マケドニア、トラキア、黒海沿岸、小アジアよりインドに至る地、エジプト、アラビアなどの共通語となった。コイナーの文献資料のうち重要なものとして、前 3 世紀にヘブル語から翻訳された『旧約聖書』の『七十人訳聖書』(*Septuaginta*)と、紀元 1 世紀の終わりから 2 世紀にかけて書かれた『新約聖書』があり、後に、これらの書物は中世ヨーロッパ人の思想・信仰の拠り所となっていく。

ローマは紀元前 5 世紀にイタリア半島をほぼ制圧し、前 188 年のセレウコス朝の都アンティオキアの征服を初めとして、マケドニア、シリア、エジプトなどの地域を次々と攻略し、前 1 世紀の終わりには地中海を内海とする世界帝国へと発展して行った。しかし、文化的にはローマ自体がすでにギリシアの影響下

にあったので、帝国内においてもギリシア語とラテン語の二つの公用語を持つに至った。ラテン語が公用語となった地域はイタリアを中心とする帝国西部であり、帝国東部はギリシア語が公用語であった。また、ローマ市民の教育ではギリシア語の学習が不可欠であったので、ラテン語を公用語とする西部出身者もギリシア語を用いれば全帝国内において意志の疎通に困ることはなかった。このような状況が、ラテン語へのギリシア語の借入を増大させる要因となった。ラテン語の名詞の約 30% はギリシア語から借入されている。

2) ギリシア語が英語に与えた影響

ギリシア語起源の多くの語が、キリスト教の普及、ルネッサンス期におけるギリシア・ローマ古典への関心の高まりと宗教改革、そして、産業革命と技術革新などともなっていて、英語に入ってきた。ギリシア語借入は、古英語期はラテン語経由で、中英語期はフランス語経由での間接借入が多いが、ルネッサンス期にはギリシア語からの直接借入が増えてくる。19世紀の産業革命や科学技術の発達以降は、新語がギリシア語要素から造り出されるようになる。

ブリテン島では、キリスト教は3世紀までにはかなり広がっていた。しかし、ブリテン島にやって来たアングロ・サクソン人はゲルマンの伝統的な自然崇拝的多神教をもっており、キリスト教はウェールズやアイルランドなど西方に追いやられた。教皇グレゴリウスの命により597年にイングランドに派遣されたアウグスティヌスは、政治権力と密接に結び付きつつ、精力的に全土への布教と異教の払拭に務め教会組織を確立した。8世紀半ばまでには、イングランドには大小数百の修道院が出現した。アングロ・サクソン人の改宗は、アルファベットの導入を初めとして、ラテン語を経由した教会用語のギリシア語や、軍事や政治などに関連した多種多様なラテン語が借入され、それ以後のイングランドの政治や文化の発展に多面的で重大な影響をもたらすこととなった。

ルネッサンス期は、印刷術の発明、大衆教育の普及、交通・通信手段の発達、イギリス帝国の勢力拡張など、あらゆる方面でイギリス人の活動が活発になった時代である。英語にとっても語彙を増やし豊かな表現ができる言語へと発達した重要な時代であった。ギリシア・ローマの偉大な叢知が再認識され、聖職者、学者、政治家のみならず、多くの層の人々の古典に対する知的欲求が高まった。16世紀には、印刷技術の発達とともに、宗教、歴史、政治、哲学、文学に関する古典の英語翻訳が次々と出版された。この傾向は新教徒の宗教改革によって更に推し進められていった。ラテン語が主要な用語であった教会においても英語が流れ込み、英訳聖書の試みが幾つかなされ、ついに、1611年にJames I世のもとで『欽定訳聖書』が完成した。

しかし、上述のような古典の翻訳を通して、英語は表現手段として貧弱なものであることを露呈することになった。翻訳家は、古典の思想を訳出するにあたり、英語に欠如している用語をラテン語から取り入れざるを得なかった。その結果、この時期に約12000語の新語が英語に入った。そのかなりの部分はラテン語の借入であったがギリシア語起源の語も多数含まれていた。かくして、英語は多様な類義語のある豊かな語彙をもつ言語となっていったのである。

18世紀末から今世紀にかけては、アメリカの独立、産業革命、民主主義の確立、科学技術の飛躍的な発達が見られ、政治的にも社会的にも極めて重要な変化をもたらされた。人間の活動が旺盛になる時代には、新語の必要性も高まる。近現代科学の学術・技術用語を生み出すために、ギリシア語やラテン語に由来する語を借入したり、それらの語幹や接辞を使って新たな語形成による新語を造っていった。ギリシア語とラテン語は、今日においても新語の供給源として、英語語彙の形成に多大な貢献をしている。

3 ギリシア系二重語の経路による分類

A) ギリシア語より直接借入した二重語

この項においては、ギリシア語からの直接借入によって生じた二重語である church/kirk をとりあげる。この二重語の語源は、ギリシア語 *κυριακόν δῶμα* “the Lord’s house” の *κυριακόν* である。このギリシア語は *κύριος* の形容詞形であり、意味は “belonging to the Lord (Christ)” であるが、中世ギリシア語に

において名詞 *κυριακόν* となり, “the Lord’s house” を意味するようになる. この語が OE *cirice*, *cyrice* を経て *church* となっていく. 一方, *kirk* は, 古英語よりイングランド北部の ON *kirkja* を経由して, イングランド北部およびスコットランドに定着する. 前母音の前の [k] は, OE では口蓋音化 (palatalization) して [tʃ] に変化したが, 北部方言やスコットランド方言では [k] を保持したため形態の違い二重語となった.

ギリシア語の *κύριος* はラテン語には借入されていない. そして, ラテン語は「教会」を意味する語としてギリシア語の *ἐκκλησία* が用いられ, ラテン語 *ecclesia* を経て英語に借入され *ecclesia* となった. このギリシア語は, *Septuaginta* において “assembly” を意味するヘブライ語 *qāhāl* の訳語として用いられた. ギリシア語 *κυριακόν* がゲルマン語に直接借入された要因は定かではない. ニカイア公会議で追放されたアリオス派がローマ帝国外のゲルマン民族に拡がっていたのを要因として考えることもできるが, ゴート語訳聖書には *ἐκκλησία* からの借入である *aikkesjo* が用いられているので根拠としては不十分であろう.

現今の学問的状况からすれば, ギリシア語から直接借入の二重語はこの一組だけである.⁽⁸⁾

church / kirk [None]

[church n.](696) “a building for public Christian worship (Distinguished historically from a chapel or oratory, which is a building in some respect private, or not public in the widest sense.)” ME *chirche*, *churche* < OE *cirice*, *cyrice* ‘public place of worship’ < MGk *κυριακόν* ‘the Lord’s house’ < Gk *κυριακόν* ‘belonging to the Lord (Christ)’

[kirk n. ‘a church’ (Northern Engl. and Scot)](c1200) “the Northern English and Scottish form or the word CHURCH, in all its senses” (In Northern English: formerly used as far south as Norfolk; and still extending in dialect use to north-east Lincolnshire) *kirk(e)* < ON *kirkja* < OE *cirice*, *cyrice* ‘public place of worship’ < MGk *κυριακόν* < Gk *κυριακόν*

B) 二重語の一方がラテン語経由のもの

ギリシア語系二重語の多くはラテン語を経由している. この項では, 少なくとも一方がラテン語から直接英語に入った二重語を取り扱う. ラテン語経由の二重語が生じる原因としては, ラテン語における母音・子音の変化や屈折やその語尾消失に伴うものがある. 母音の変化で生じた二重語の例として *pain/pine* や *corona/crown* が挙げられる. *pain/pine* は *ποινή* (“punishment”) を語源とし, L *poena* を経て OE に *pain* となった. ラテン語がロマンス語になる過程で, 二重母音が音質的变化を受けて単母音化して [oe] が [e] となった. *pine* は, その変化を受けた OF *peine* を経由して ME に入った.

子音の変化により生じたギリシア語系二重語では, ‘h’ の無音化, 口蓋音化によるものが見出される. 母音の前の ‘h’ はローマ古典時代末期までには既に発音されなくなっており, 俗ラテン語では知られない音であったのでフランス語には現れなかった. しかし, 古フランス語でも, ゲルマン語の借入語によってこの音が導入され弱く発音されていたが, 発展途上で発音されなくなった. 中英語において, ゲルマン語系フランス語の借入では ‘h’ は維持されラテン語系フランス語の借入では不安定であった. しかし, 14世紀以降ラテン語からの直接の影響により, 綴り字上も発音上も保持される語が出てきた. その二重語の例としては, *emerods/hemorrhoids* がある. 口蓋音化で生じた二重語として, *camera/chamber* を取り上げることができる. ラテン語においては母音 [a] に先行する c[k] の音は保持されたが, フランス語は [k] > [kχ] > [tχ] > [tʃ] へと口蓋音化が進み, さらに擦音化され [ʃ] となった. ラテン語から直接借入された *camera* は [k] を保持し, *chamber* は口蓋音化を受けた OF *chambre* を経由して英語に入った. なお, OF *chambre* の ‘b’ の挿入は, ラテン語がロマンス語化する過程で, 弱母音の ‘e’ が消失し *camera* が *camra* となり, ‘m’ と ‘r’ が接してわたり音 ‘b’ が生じたためである.

屈折によって生じた二重語には, *base/basis*, *paper/papyrus*, *phase/phasis* などがある. 文語の古典ラテン語の六つの格は, 口語の俗ラテン語では著しく減少した. 前置詞による分析的表現の発達の結果, 属格, 与格, 奪格の順で格変化は失われていった. そして, 語尾子音が脱落傾向にあったフランス語では対

格の語尾 -m も失われた。この変化によって生じたのが *base/basis*, *paper/papyrus* である。また, *phase/phasis* は, *phase* が L *phasis* の複数形 *phases* の逆形成によって生じ, *phasis* はラテン語より借入されて, 二重語となった。

一方がラテン語借入語のゲルマン語形のために生じた二重語の例として, *plum/prune* がある。この二重語の語源は, Gk *πρωόμυον* であり, L *prūnum* を経由し, *plum* はゲルマン語形を経て *plúm* の形態で古英語に入り, *prune* は中世ラテン語と古フランス語を経て *prunne*, *prune* の形態で中英語に入った。*plum* の pl- は, 古英語において異化(dissimilation)により生じたものであり, この現象はラテン語のゲルマン語形やイングランドにおいて書かれた中世ラテン語に見出されるものである。OE *plúm* は, 主強勢を受けている母音[u:]を同じ長母音として受け入れたが, 13世紀ごろから始まった[x, v, m]の直前にある[u:]の短音化(shortening)の影響を受けて[u]となり, さらに, 15世紀始め頃から生じたME[u]の非円唇化(delabialization)により[ʌ]となった。

少なくとも一方がラテン語経由で英語に入った二重語は以下の通りである。

①いずれもがラテン語経由の二重語

dolphin / dauphin [None]

[*dolphin* n.](13..) “a species of cetaceous mammal(*Delphinus Delphis*), having a longer and more slender snout than the porpoise, with which it is frequently confounded, so that the two names become interchanged; sometimes applied also to the grampus” ME *delphin*, *delfyn* < L *delphīnus*, *delphīn* ‘dolphin’ < Gk *δελφίς* ‘dolphin’

[*dauphin* n. ‘the title of the eldest son of the king of France’](1485) “the title of the eldest son of the King of France, from 1349 to 1830” < MF *dauphin* < OF *daufin* ‘originally, a family name’ < ML *Dalphinus* ‘(lit.)dolphin [a name born by Guigo IV, count of Vienne; because their banners bore a dolphin as their symbol]’ < L *delphīnus* < Gk *δελφίς*

emerods / hemorrhoids [None]

[*emerods* n.](a1400) “hemorrhoids” ME *emeraudes*, *emerodes* < L *hæmorrhoidae* < Gk *αἰμορροΐδες* ‘(veins)liable to discharge blood)’

[*hemorrhoids* n.](1398) “a disease characterized by tumours of the veins about the anus” < OF *emoroyde*(13c)*hemorrhōide*(16c) < L *hæmorrhoidae* < Gk *αἰμορροΐδες*

minster / monastery [Klein, Barnhart, 研究社]

[*minster* n.](a900)†“a monastery; a Christian religious house” ME *mynster*, *mynstre* < OE *mynster* < VL **monisterium* < Eccles. L *monastērium* ‘living alone; monk’ < Eccles. Gk *μοναστήριον* ‘a monastery’ ← *μονάζειν* ‘to live alone’

[*monastery* n.](1432-50) “a place of residence of a community of persons living secluded from the world under religious vows; a monastic establishment. Chiefly, and now almost exclusively, applied to a house for monks; but applicable also to the house of any religious order, male or female” ME *monasterie* < Eccles. L *monastērium* < Eccles. Gk *μοναστήριον* ← *μονάζειν*

phasis / phase [None]

[*phasis* n.](1660) “each of the aspects presented by the moon or any planetary body, according to the extent of its illumination: (Now usually phase.)” < Mod L *phasis* < Gk *φάσις* ‘appearance(of a star), phase(of the moon)’

[*phase* n.](1812) “each of the aspects or appearances presented by the moon or any planetary body, according to the amount of its illumination” Back formation of *phases*(pl. of Mod L *phasis*) < Gk *φάσις*

priest / presbyter [研究社]

[*priest* n.](?601-4) “(in hierarchical Christian churches)a clergyman in the second of the holy

orders(above a deacon and below a bishop), having authority to administer the sacraments and pronounce absolution” ME *prest* < OE *prēost*(shortened form) < LL *presbyter* < Gk *πρεσβύτερος* ‘elder, older’, *πρέσβυς* ‘old(man)’

[presbyter n.](1597) “an elder in the Christian church: one of a number of officers who had the oversight and management of the affairs of a local church or congregation, some of them having also the function of teaching” < LL *presbyter* < Gk *πρεσβύτερος*

② < ラテン語 vs. < フランス語 < ラテン語

anthem / antiphon [Klein, Barnhart⁽⁹⁾]

[anthem n.](a1000) “a composition, in prose or verse, sung antiphonally, or by two voices or choirs, responsively” ME *antefne*, *antem* < OE *antefn(e)* < ML *antiphōna* < Gk *ἀντίφωνα*(neut. pl. of *ἀντίφωνος* ‘sounding in answer to’)

[antiphon n.](c1500) “a composition, in prose or verse, consisting of verses or passages sung alternately by two choirs in worship; = ANTHEM in the original sense, but passing also early into the modern sense of *anthem*” < F *antiphone* < ML *antiphōna*(an adaptation as a n. fem. sing. of Gk *ἀντίφωνα*) < Gk *ἀντίφωνα*(neut. pl. of *ἀντίφωνος*)

athanasy / tansy [None]

[athanasy n.](1829) “deathlessness, immortality” < L *athanasia* < Gk *ἀθανασία* ‘immortality’

[tansy n.](c1265) “an erect herbaceous plant: formerly much used in medicine as a stomachic, and in cookery” ME *tanesey*, *tansy* < OF *tanésie*, *tanoisie*(aphetic form of *athanasie*) ‘the hearbe Tansie’ < ML *athanasia* ‘tansy’ < Gk *ἀθανασία*

basis / base [Barnhart, 研究社]

[basis n.](1571) “the bottom of anything, considered as the part on which it rests or is supported” < L *basis* ‘pedestal, base’ < Gk *βάσις* ‘a stepping, step, pedestal, foot’

[base n.](c1325) “the bottom of any object, when considered as its support, or as that on which it stands or rests” ME *basse*, *bas*, *baas* < F *base* < L *basis* < *βάσις*

camera / chamber [Barnhart, 研究社]

[camera n.](1708) “in Latin sense: an arched or vaulted roof or chamber. Given in mod.

Dicts., but probably not in Eng. use, exc. in such cases as ‘the Camera’ of the Radcliffe Library at Oxford” < L *camera* ‘vault, arched roof, arch’ < Gk *καμάρα* ‘anything with an arched cover, a covered carriage’

[chamber n.](a1300) “a room(in a house); a room or apartment in a house; usually one appropriated to the use of one person” ME *chaumbre*, *chambre* < OF *chambre* ‘room, chamber’ < L *camera* ‘vault, arched roof, arch’ < Gk *καμάρα*

chorus / choir, quire [None]

[chorus n.](1561) “an organized band of singers and dancers in the religious festivals and dramatic performances of ancient Greece” < L *chorus* ‘dance, band of dancers and singers’ < Gk *χορός* ‘dance, band of dancers and singers: dance in a ring’

[choir, quire n.](c1300)† “the clergy of a cathedral or collegiate church engaged in performing the church service: formerly more or less coextensive with CHAPTER” ME *quer* < OF *cuer*(F *chaur*) < L *chorus* ‘dance, band of dancers and singers’ < Gk *χορός*

cholera / cholera [None]

[cholera n.](c1386)† “choler, bile” ME *colora*, *colera* < L *cholera* < Gk *χολέρα* ‘bilious diarrhoea, cholera’ ← *χολή*, *χόλος* ‘gall, bile’

[cholera n.](c1386) “bile; as one of the ‘four humours’ of early physiology, supposed to cause irascibility of temper” ME *coler*, *colere* < OF *colere*(F *colère*) ‘choler, anger’ < L *cholera*

< Gk *χολέρα* ← *χολή*, *χόλος*

corona / crown [Barnhart, 研究社]

[corona n. 'a crown'](1658) "a small circle or disc of light(usually prismatically coloured) appearing round the sun or moon" < L *corōna* 'garland, wreath, crown' < Gk *κορώνη* 'anything curved; crown'

[crown n.](c950) "Christ's crown of thorns" OE *corona* < L *corōna* < Gk *κορώνη*
(c1325) "an ornamental fillet, wreath, or similar encircling ornament for the head, worn for personal adornment, or as a mark of honour or achievement" ME *crowne* ← *crune*(syncopated form of *coroune*, *corune*) < AF *coroune* ← ONF *corune*, *curune*(=OF *corone*, F *courounne*) < L *corōna* < Gk *κορώνη*

dactyl / date [Barnhart⁽¹⁰⁾]

[dactyl n. 'a metrical foot consisting of one long syllable followed by two short syllables or one accented followed by two unaccented'](1398) "the fruit of the date-palm" ME *dactylle*, *dactile* < L *dactylus* < Gk *δάκτυλος* 'finger; dactyl'

[date n. 'fruit of the palm tree'](c1290) "the fruit of the date-palm(*Phoenix dactylifera*), an oblong drupe, growing in large clusters, with a single hard seed or stone, and sweet pulp; it forms an important article of food in Western Asia and Northern Africa, and is also dried and exported to other countries." ME *date* < OF *date*(F *datte*) < OProvenç *datil*(or fr. It *dattero*) < L *dactylus* < Gk *δάκτυλος*

eremite / hermit [Klein]

[eremite n. 'hermit'](c1200) "one who has retired into solitude from religious motives; a recluse, hermit: Said esp. of the Christian solitaries from the 3rd cent. onwards, as distinguished from the cœnobites, who, though withdrawn from the world, lived as members of a community" ME *eremite* < Eccles. L *erēmīta* < Gk *ἐρημίτης* 'hermit' (lit. 'he who lives in the desert') ← *ἐρημία* 'desert'

[hermit n.](c1205) "one who from religious motives has retired into solitary life; esp. one of the early Christian recluses" ME *ermit*, *hermit* < OF *ermite*, *hermite*(F *ermite*) < Eccles. L *erēmīta* < Gk *ἐρημίτης* ← *ἐρημία*

jealous / zealous [Klein, 研究社]

[jealous](1382)† "vehement in feeling, as in wrath, desire, or devotion" ME *gelus*, *gelos* < OF *gelos*(12c)(F *jalouz*, -ouse) < LL *zēlōsus* ← LL *zēlus* < Gk *ζήλος* 'emulation, zeal, jealousy'

[zealous](1535) "full of or incited by zeal(of person)(In the 17th c. sometimes connoting puritanical zeal.)" ME *zelous* < ML *zēlōsus* ← LL *zēlus* < Gk *ζήλος*

nausea / noise [Klein, Barnhart⁽¹¹⁾]

[nausea n.](1569) "a feeling of sickness, with loathing of food and inclination to vomit" ModE *nausea* < L *nausea*, *nausia* 'seasickness' < Gk *ναυσία* 'seasickness, lit. ship sickness'

[noise n.](a1225) "loud outcry, clamour, or shouting; din or disturbance made by one or more persons" ME *noyse*, *noys*, *noyes* < OF *noise* < L *nausea* 'seasickness' < Gk *ναυσία*

papyrus / paper [研究社]

[papyrus n.](1388) "an aquatic plant of the sedge family, the Paper Reed or Paper Rush; formerly abundant in Egypt, and the source of the writing material used by the ancients" ME *papyrus* < L *papyrus* 'papyrus, paper made of papyrus stalk' < Gk *πάπυρος* 'papyrus, paper-rush'

[paper n.](1341-2) "a substance composed of fibres interlaced into a compact web, made(usually in the form of a thin flexible sheet, most commonly white)from various fibrous

materials, as linen and cotton rags, straw, wood, certain grasses, etc., which are macerated into a pulp, dried, and pressed (and subjected to various other processes, as bleaching, colouring, sizing, etc., according to the intended use)" ME *papure, papire, papir* < OF(=F) *papier* < L *papyrus* < Gk *πάπυρος*

paralysis / palsy [Klein, Barnhart, 研究社]

[paralysis n.](c1000) "a disease or affection of the nervous system, characterized by impairment or loss of the motor or sensory function of the nerves, esp. of those belonging to a particular part of organ, thus producing (partial or total) incapacity of motion, insensibility, or popular use" < L *paralysis* < Gk *παράλυσις* 'disabling of the nerves, paralysis'

[palsy n.](a1300) "a disease of the nervous system, characterized by impairment or suspension of muscular action or sensation, esp. of voluntary motion, and, in some forms, by involuntary tremors of the limbs; paralysis" ME *palesie, parlesie* < MF *paralysie* < L *paralysis* < Gk *παράλυσις*

pine / pain [Barnhart]

[pine n.](c1160)† "punishment; suffering inflicted as punishment, torment, torture" ME *pine, pyn* < OE **rīn* < ML *pēna* < L *poena* 'punishment, pain' < Gk *ποινή* 'quit-money for blood spilt (paid by the slayer to the kinsmen of the slain)'

[pain n.](1297) "suffering or less inflicted for a crime or offence; punishment" ME *peyne, peine, paine* < OF *peine* < L *poena* < Gk *ποινή*

plum / prune [Barnhart, 研究社]

[plum n.](c725) "the fruit of the tree *Prunus domestica*, a roundish fleshy drupe of varying size and colour, covered with a glaucous mealy bloom, and having a somewhat flat pointed stone and sweep pulp" ME *plumme, plum* < OE *plūme* < VL *prūna* < L *prūnum* 'plum' < Gk *προδμνον* 'plum'

[prune n.](1345-6) "the dried fruit of several varieties of the common plum-tree, produced in France, Germany, Southern Europe, California, etc., and largely used for eating, raw or stewed; a dried plum (Formerly distinguished as *dry prune.*)" ME *prunne, prune* < OF(=F) *prune* < ML *prūna* < L *prūna* (neut. pl of *prūnum* 'plum') < Gk *προδμνον*

terebinth / turpentine [None]

[terebinth n. 'a tree of the sumac family yielding turpentine'] (1382) "a tree of moderate size, *Pistacia Terebinthus*, N. O. Anacardiaceae, a native of Southern Europe, Northern Africa, and Western Asia, the source of Chian turpentine, and a common object of veneration" ME *theribynte* < L *terebinthus* 'the terebinth-tree' < Gk *τερέβινθος* 'of the terebinth-tree'

[turpentine n. 'oleoresin exuding from the terebinth'] (1398) "a term applied originally (as in Gr. and Lat.) to the semifluid resin of the terebinth tree, *Pistacia Terebinthus* (Chian or Cyprian turpentine)" ME *terebentyne, terbentyne* < OF *turbentine, terebentine* (F *térébenthine*) < ML *terebintina* (*resina*) 'terebinthine resin' < L *terebinthus* < Gk *τερέβινθος*

theriac / treacle [None]

[theriac n.](c1000) "an antidote to poison, esp. to the bite of a venomous serpent" ME *theriaca, tiriake* < L *thēriaca* < Gk *θηριακή* 'antidote' (fem. of *θηριακός* 'pertaining to wild or poisonous animal')

[treacle n.](1340)† "(Old Pharm.) a medicinal compound, orig. a kind of salve, composed of many ingredients, formerly in repute as an alexipharmic against and antidote to venomous bites, poisons generally, and malignant diseases" ME *triacle* < MF *triacle* < OF *triacle* < VL **triacula* < L *thēriaca* < Gk *θηριακή* (fem. of *θηριακός*)

thesaurus / treasure [Barnhart, 研究社]

[thesaurus n.](1565) “a ‘treasury’ or ‘storehouse’ of knowledge, as a dictionary, encyclopaedia, or the like” < L *thēsauros* < Gk *θησαυρός* ‘treasure, treasure house’

[treasure n.](1154) “wealth or riches stored or accumulated, esp. in the form of precious metals; gold or silver coin; hence in general, money, riches, wealth” ME *tresor*, *tresour* < OF *tresor*, *tresour* < L *thēsauros* < Gk *θησαυρός*

③<ラテン語 vs. <オランダ語<ラテン語

asphodel / daffodil [Klein]

[asphodel n.](1578) “a genus of liliaceous plants with very handsome flowers, mostly natives of the south of Europe” ModE *asphodill* < L *asphodelus* < Gk *ἀσφόδελος*

[daffodil n.](1548)† “the same as AFFODILL; the genus *Asphodelus* (formerly including some allied plants)” ModE *daffodyll* < Du *de affodil* ‘the asphodel’ < OF *affrodile* (a var. of *asfodile*) < L *asphodelus* < Gk *ἀσφόδελος*

④<ラテン語 vs. <ゲール語<ラテン語

sponge / spunk [None]

[sponge n.](c1000) “the soft, light, porous, and easily compressible framework which remains after the living matter has been removed from various species of porifers” ME *spoung*, *spwng* OE *sponge*, *spunge* < L *spongia* < Gk *σπογγία* ‘sponge’

[spunk n. ‘touchwood’](1536) “(Sc. and dial) a spark” ModE *sponke*, *sponk* < Gael *spong*, or Ir *sponç* ‘tinder, sponge’ < L *spongia* ‘a sponge; an open-worked cuirass’ < Gk *σπογγία*

[つづく(次号にて完結)*]

注

- (1) McArthur, Tom ed. *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford: Oxford UP. p.1091
- (2) フレデリック・ウッド. 『ウッド英語史概説』(高橋博訳)東京: 泰文堂, 1981. p.77
- (3) マンフレート・シェーラー. 『英語語彙の歴史と構造』東京: 南雲堂, 1990. pp.91-92
- (4) 安達一美「英語語彙におけるイタリック系二重語(1)」『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編)42』1994. p.10, 及び「英語語彙におけるゲルマン系二重語(1)」『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編)45』1997. p.2
- (5) Allen, Edward A. “*English Doublets.*” *Publications of the Modern Language Association of America*, Vol. XXIII, 1908
- (6) 前掲「英語語彙におけるイタリック系二重語」において取り上げた二重語のうちギリシア語系と判明した25組を改めて本論文において取り上げた。
- (7) Klein, Ernest. *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*. Amsterdam: Elsevier, 1966. Barnhart, K. *The Barnhart Dictionary of Etymology*. New York: Wilson, 1988.
- (8) 各二重語の直後の[]は三辞書のうち二重語と認定している辞書を表し, [None]は三辞書とも認定の記載がされていないことを示す。また, 各語の直後の数字は *OED* における初出の年数を表し, 数字の前の a は before, c は about を意味し, “” は初出の語義である。< は借入を, “” は各語の語義を表す。
- (9)(10)(11) これらの二重語は, 研究社の『新英和大辞典』においては二重語として認定の記載がされていないが, 研究社の『英語語源辞典』(寺澤芳雄編, 1997年)では二重語として記載されている。

*参考文献は, 次号 (Part 2 - 完結編) において一括掲載する。